



上村 司
政府代表・中東和平担当特使

中東協力センター設立50周年によせて

中東協力センター設立50周年、まことにおめでとうございます。

この間、中東地域では幾つもの大きな変動があり、また日本と中東地域を取り巻く世界の政治経済状況も大きく変わり続けてきました。その中で、中東協力センターが日本と中東地域、とりわけ湾岸産油国との重要な紐帯としての役割を果たされ、また、それらの国の産業育成や人材育成に弛みなく取り組んでこられたこと、そして何よりも、さまざまな分野で地に足のついた大きな成果を挙げられていることに、心から敬意を表します。

個人的なお話をしてみことに恐縮ですが、私が外務省に入省したのは、イラン革命、そして第二次石油ショックの余韻冷めやらぬ 1981 年のことでした。「油を舐めただけで油井の場所が分かる専門家になりたい」などと、それぞれ世間知らずのナメたことを言って外務省の採用試験をなんとか潜り抜けた若僧も、あれから 40 有余年、(当然のことながら) 油を舐めて産地が分かる専門家にはなり損ねましたけれど、様々な機会に中東協力センターの活動を見聞きし、また中東協力センターの皆様からいろいろ貴重なご支援とご助言をいただいて、なんとか外務省での 41 年間のお役目を務めることが出来ました。その中でもとくに、1990 年代後半に参事官として、また 2017 年から 2020 年は大使として、2 度のサウジアラビア勤務を経験した私は、日本とサウジアラビア関係の地平の拡大と分野ごとの関係の深化という二つの面において果たされた中東協力センターの役割を目の当たりにし、大いに感銘を受けました。今そのことを懐かしく思い出しています。

私が参事官としてリヤドに勤務していた 90 年代当時の日サ関係は、エネルギー分野を中心として、長年の友好関係に基づく安定的な関係を謳歌していましたが、これをさらに 21 世紀に向けてどのように発展・深化させていくか、が当時の一つの大きな課題でした。97 年 10 月の橋本総理のサウジ訪問にあたって発出された「21 世紀に向けた包括的協力の枠組文書」はそれに答える試みの一つでした。この中では産業多角化や学術交流など多岐にわたる二国間関係の可能性が言及され、中東協力センターが主導されていた日本・サウジアラビア民間合同委員会(当時)の中でも大いに議論をしていただいたと記憶しております。ちなみに、この「包括的協力枠組」の考え方はその後の日サ関係の中で脈々と受け継がれてきたと思います。私が大使として在勤していた 2017 年に発表された、新しい日サ関係の基本文書である「日サ・ビジョン 2030」文書にも、20 年前の「包括的協力枠組」の精神が宿っています。この一連の流れの奥には、政府開発援助(ODA)の出しづらいうサウジアラビアとの関係において、大変重要な役割を果たされてきた中東協力センターの存在がありました。サウジは、今後もムハンマド皇太子の指導のもと、サウジ大改革「サウジ・ビジョン 2030」の推進に邁進していくことでしょう。これはサウジが真に必要な世紀の大改革です。日本としてもこの取組みを積極的に支えていく必要があります。すでに中東協力センターはサウジアラビア内の 3 拠点(リヤド・ジェッダ・ダンマン)に事務所を開設しておられます。今後ともぜひ積極的な取組みを続けていただけますようお願い申し上げます。

もう一つ、私の経験の中で忘れられないことは、サウジアラビア電子機器・家電製品研修所(SEHAI)における取り組みです。サウダイゼーションの掛け声は 1990 年代から頻りに聞かれたところではありますが、現実にはいろいろな要因からなかなか思うようには進みませんでした。しかし 21 世紀に入って、日本はこの分野における取り組みにアクセルを踏み込み、従来は外国人労働者頼みであった、地場経済を直に支える人材の育成を活発化させます。当初は、リヤド在住の各国外交官らから日本のそのような取り組みに興味半分の視線を受けたことを思い出しますが、結局こういった先進的な日本の取り組みが 2010 年代になって花開きます。その大きな成功例の一つがこの SEHAI の電子機器分野での中堅人

材の育成の取り組みでした。私も何度か SEHAI 卒業式に参列させていただいたり、卒業生の方々と交流をさせていただきましたが、彼らの陽気さ、前向きさにサウジの新しい未来を見た気がしました。文化的な違いも大きい中で、さまざまな苦勞を乗り越え、弛みなく、立派に彼らを育成されてきた中東協力センターと傘下の専門家の皆様方の取り組みにはほんとうに頭の下がる思いがします。

このように、中東協力センターと中東諸国、なかんずく湾岸産油国との絆は日本のそれら諸国とのいしずえと言っても過言ではないと思います。これからも多くの困難と挑戦が我々の前にあらわれてくるでしょう。その中で、今後中東協力センターの果たされる役割はますます重要となります。これまでの感謝とこれからの期待とお願いを込めまして、中東協力センターのますますのご発展を心から祈念いたします。

